

## 論文審査の結果の要旨

上記の論文は、メルロ=ポンティ哲学の根本的なモチーフともいえる「経験の構造」の解明を目的とする。彼は、『知覚の現象学』における知覚論・身体論、「間接的言語と沈黙の声」や『目と精神』等における表現論・芸術論、『ヒューマニズムとテロル』や『弁証法の冒険』における政治哲学等、多様なテーマを展開しながら自らの哲学を深化させるが、こうした多方面にわたる展開は「経験の構造」の解明を根本的動機として有機的に相互に関係している。

第一章では共感覚の問題について考察する。メルロ=ポンティは知覚に関する古典的心理学や主知主義的な解釈を斥け、どのような単純な知覚においてさえもゲシュタルトとしての意味が存在し、知覚された世界は常に相貌的に存在すると考える。知覚のこの根本的な「事実性」を、視覚や聴覚、触覚といった感覚相互の交流という観点から明らかにするのが本章の狙いである。

第二章でも知覚経験の問題を論じるが、ここでは表現論や芸術作品論の視点、特に音楽作品という視点からそれを考察する。彼の芸術論は絵画芸術などの視覚芸術を中心に展開されるが、それにとどまらずより広い射程を備えたものであることを確認する。

第三章でも表現の問題を中心に論じる。彼は始原的な世界の光景である「野生的表現」を、セザンヌらの芸術家の作品のみならず幼児のデッサンにも認めながらも、両者を厳密に区別するために自らの表現論に「歴史性」という概念を導入するに至る。

第四章では、「歴史性」の問題の考察にとって必要不可欠な「他者」の問題を取り上げる。彼の他者論は前人称的かつ潜在的な次元、すなわち間身体的な相互主観性の次元において展開されるが、その際に私と他者との間の絶対的な差異が無化されてしまうという批判を招くことになる。本章では、こうした批判への応答も含めて、他者性や共存の内幕を際立たせる。

第五章では、引き続き他者論、特に「他者との対話」というテーマに注目する。他者との対話においては他者との相克や闘争の可能性が存在するが、このことは、彼の他者論が、他者の特異性や私と他者との絶対的な差異と隔たりとを無化するものだという批判に対して十分に答え得るものであることを示している。

第六章では、メルロ=ポンティの政治哲学に焦点が絞られるが、その際にこれまで論じてきたテーマと彼の政治哲学との関係を明確にすることが重要な論点となる。彼の政治論の核心は、歴史が意味=方向(sens)を持ちつつも偶然性と暴力の可能性を孕むものであること、および「非-政治的なものとしての政治哲学」であることに存する。

第七章では、彼の言う「非-政治的なもの」の意義を考察する。彼にとっては、マルクス主義も自由主義も共に自己の理念の為に歴史における暴力や死や悲惨を隠蔽するという点において偽善的な思想である。こうして彼はいかなる政治的立場にも依らない「非-政治的なものとしての政治哲学」を構想するに至る。

以上のように、本論文はメルロ=ポンティの哲学における知覚論、表現論、他者論、政治論等の多様なテーマを展開することによって、各々の要素が身体性・共存性・歴史性を媒介にして有機的に結びついていることを解明し、多角的な視点から「経験の構造」を明らかにしている。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。